# 日本語における複合動詞の起源について

百留　康晴*

Yasuharu HYAKUTOME

Origin of V-V Compounds in Japanese

**要　　旨**

日本語には動詞＋動詞型の複合動詞が多数存在し、多様な表現性を有している。このタイプの複合動詞はアジア地域の諸言語に見られるが、日本語の複合動詞は数と種類において他の言語を凌駕しているように見えるとされる。しかし、そもそも日本語において複合動詞はどのようにして発生したのだろうか。そこで本論では古代日本語における複合動詞の特徴や口頭伝承のあり方から複合動詞の起源について明らかにすることを試みた。その結果、上代を中心として古代語における複合動詞の結合が緩かったことを確認した。古代における複合動詞は形態的なまとまりは緩く、複数の動詞を連続させたものであったと考えられる。そのような複合動詞が発生したことの背景には動作が眼前で行われつつあるかのように、劇を見ているかのように感じさせる当時の口頭伝承のあり方が存在することが明らかになった。そして、それは現代日本語における会話に見られる特徴と一致する。このことから複合動詞の発生が日本語が古代から現代に至るまで自分と聞き手の眼前にあるものをもとに会話や叙述を展開することを基本とする映像的な言語であることを背景としていることが明らかになった。

【キーワード：複合動詞，起源，形態的緊密性，映像的】

## はじめに

日本語には動詞＋動詞型の複合動詞が多数存在し、多様な表現性を有している。影山編（2013）「はじめに」によれば「このタイプの複合動詞は古代サンスクリット語を始めインドヨーロッパ諸言語にほとんど観察されず、日本語、朝鮮語、チュルク諸語、中国語、インドを含む南アジア諸言語に共通して見られることが指摘されている」。「そして、東アジア地域の中でも、日本語の複合動詞は数と種類において他の言語を凌駕しているように見える」とされる。

それではなぜ日本語には複合動詞が存在し、同じく複合動詞が存在する東アジア地域の言語の中でもより発達しているのだろうか。複合動詞は少なくとも『古事記』『万葉集』に確認できるほど古くから存在し、日本人の言語生活に深く根差していると言える。そこで本論では歴史をさかのぼって日本語における原初的な姿を分析することで複合動詞の起源について論じたい。

現代語における複合動詞はいずれも緊密な形態的まとまりを有する語である（影山1993）。しかし古代語においては結合が緊密ではなく、二語の連続であったと見られている（金田一1953，吉澤1952，中村1971，青木2013）。また古代でも上代と中古とを比較すると上代の複合動詞の方が動詞の結合順が自由でより制約が少なく、その形態的まとまりは緩やかであると考えられている（関1977，山王丸2009）。このことから日本語における複合動詞は歴史的にさかのぼればさかのぼるほど結合に制約が少なく、形態的まとまりが緩やかになる傾向を有すると推測される。

以上から本論では複合動詞の成り立ちについて、当初複数の動詞を連続させ、具体的な一連の内容を表す表現として発生し、使用され続ける過程で動詞間の意味的な一体化が進行し、さらに形態的な一体化を獲得するに至り、語形成規則が変化し、現代の形に至るという一連の過程を想定する。現代語における複合動詞を基準として複合動詞を規定すれば歴史を遡れば遡るほど複合動詞とは呼べない表現が現れる。しかし、過去のいずれの時点における「動詞＋動詞」表現でも現代語における複合動詞へと連なるものであると考えられる。そこで、本論ではそれぞれを広く複合動詞と呼ぶことにしたい。

上記に従って第１節では古代語複合動詞の形態的まとまりについて論じる。第２節では『古事記』の複合動詞を中心に複合動詞の原初的な姿を論じる。第３節では話し手・聞き手・共有映像の三項関係に依拠し、映像的に展開される（熊谷2011）という日本語の言語的特徴から複合動詞の起源について論じる。第４節ではまとめと課題を述べる。

## １．古代語複合動詞の形態的緊密性

前述の通り古くは複合動詞の形態的なまとまりが現代語ほど緊密ではなかったことが指摘されている。そこで

*　島根大学教育学部言語文化教育講座

本節では古代語複合動詞の形態的緊密性について論じる。さて古代語の複合動詞における形態的なまとまりが現代語ほど緊密ではなかったことの根拠として助詞の介入が挙げられる。金田一（1953）は「咲き初む」「降りまさる」という語は古い時代には「咲きか初むらん」「降りぞまされる」のように時に中間に助詞の類を入れて用いられることからこれは二つの動詞の結合がゆるかったことを表すと主張した。

影山（1993）76頁でも語は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介入させることは許されない。現代語における複合動詞は以下のように「も」等の介在を許さない。このことは、いずれも語であることを示しているとされる。

（1）*飛びモ上がる　*泣きモ叫ぶ　*歩きモ回る

したがって、金田一の示した助詞の介入という根拠は現代語とも同じ尺度で検証可能な重要な根拠となることから、この点を中心に古代語複合動詞における形態的緊密性を論じたい。吉澤（1952）は金田一の指摘した動詞と動詞の間に助詞が入り得たことに対して、上代・中古の複合動詞において動詞間に助詞が入らない例と入る例とを併記し、「や」「ぞ」「か」「は」「も」「こそ」の助詞が入り得たことを例証した。吉澤の示した用例は以下のものである。

（2）うつせみの人目を繁み石走り間近き君に恋ひ渡るかも　万葉集・巻四
（3）住吉の粉浜の四時美開けも見ず隠りてのみや恋ひ渡りなむ　万葉集・巻六
（4）慰もる心は無しに斯くのみし恋ひや渡らむ月に日にけに　万葉集・巻十一

（5）霞立つ春の永日を恋ひ暮し夜の深け行けば妹は逢はむかも　万葉集・巻十
（6）我が夫子が朝明の姿よく見ずて今日の間を恋ひ暮すかも　万葉集・巻十二
（7）朝戸出の君が容儀をよく見ずて長き春日を恋ひや暮さむ　万葉集・巻十

（8）慰むる心はなしに雲隠り鳴き往く鳥の哭のみし泣かゆ　万葉集・巻五
（9）ひさかたの雨間もおかず雲隠り鳴きぞ行くなる早田雁がね　万葉集・巻八

（10）梅の花咲き散る苑に吾行かむ君が使を片待ちがてり　万葉集・巻十
（11）高円の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに　万葉集・巻三

（12）涙にやくちはてなまし唐衣袖のひるまとたのめざりせば　千載和歌集　巻十三
（13）思へどもいはでの山に年を経て朽ちやはてなむ谷の埋れ木　千載和歌集　巻十一
（14）ほに出でし蘆のふし葉の下乱れ入江の浪に朽ちははつとも　新千載和歌集　巻十一

（15）契り置かむこの世ならでも蓮の葉に玉ゐる露の心へだつな　源氏物語　若菜
（16）よそへてぞ見るべかりける白露の契りか置きし朝顔の花　源氏物語　寄生
（17）春の月かすめる空の梅が香に契りも置かぬ人ぞ待たるる　新勅撰和歌集　巻十六

（18）降りまさる年をかさねてみつる哉ならびの岡の松の白雪　続千載和歌集　巻六
（19）雪とのみ降りこそまされ山桜うつろふ花の春の木のもと　続千載和歌集　巻三

他に中村（1971）、佐佐木（2015）も『万葉集』の和歌において動詞間に助詞が介入する例を示し、上代語における複合動詞の結合の緩さを詳細に明らかにしている。中村（1971）は中村（1969ab）を承け、『万葉集』の複合動詞における助詞「は」「も」「や」「か」「ぞ」「こそ」「し」「のみ」の介入を詳細に例証している。さらに「なーそ」の介入や漢文式表記に見る返読文字の介入など表記面にも検討が及び、上代の複合動詞があまり緊密に結合していなかった様相を明らかにしている。

また、佐佐木（2015）は複合動詞ではなく「二つの動詞が連なった上代の表現」という名称を用い、上代語において狭義の係助詞Aか　Bや　Cそ／ぞ　Dこそ、広義の係助詞Eし　Fも　Gは、の７種の助詞が動詞の間にある場合について用例上・用法上の実態を確認し、考察している。考察の結果二つの活用語の間にA～Gの助詞が位置する実例は、確例のないDの「こそ」を除いて、『萬葉集』だけでも百を超え、この種の表現は、上代では極めて一般的なものだったと結論付けている。

佐佐木の指摘で興味深いのは以下のことである。根幹的な意味を表す動詞と「相ひ…」「合へ…」「たまふ…」「…かぬ」「…わたる」「…えず」「…あふ」「…まさる」「…ます」などの、補助的な機能をもつ語との間にも、さまざまな助詞が位置しえた。しかし、動詞とそれに付く助動詞との間に助詞が位置することはない。「有りそかねつる」〔4・613〕に含まれる「そ」が、補助動詞的な語と助動詞との間に位置する「有りかねそつる」のような表現は存在しなかった（下線は引用者が付した）。また「君は言ひ手寸（てき）」〔12・2947〕「さ夜更（ふ）け去（に）家里（け）」〔11・2821〕「霞み多流良牟（たるらむ）」〔20・4489〕などのように、複数の助動詞を重ねて用いることも多かったが、二つの助動詞の間に助詞が位置する例は見当たらない。

語彙的な意味を表す要素が文法的な意味を表す要素へ変化することを文法化と呼ぶが、複合動詞を構成する動詞の意味が抽象化し、補助動詞的になることも文法化の一種であり、助動詞も文法化によって生じた。しかし、

同じく文法化現象と捉えられる両者であっても上代における語としてのまとまりという点からは動詞と助動詞、助動詞と助動詞との結合が緊密になっていた一方、補助動詞的な語と動詞とは緊密なまとまりを形成することができなかったという違いがあることが分る。

これまでこのような補助動詞的な語の存在を動詞間の結合の緊密化の指標とする向きもあった。しかし、佐佐木はそれを否定する材料を提示していると言える。根幹的な意味を表す動詞と補助的な機能をもつ語との間にもさまざまな助詞が位置しえた理由として、佐佐木は、上代では文の中に現れる語と語との意味的な関係が緩かったらしいこと、また現代人には補助的な語だと見えてもそれらは本来の意味をかなり保持していたらしいことなどを想定している。

当時の複合動詞全体において動詞間の結合が緩かったことに加え、補助動詞的と見られる語の意味と本来の意味とに何かしらのつながりを意識することが可能であったとすれば、動詞間の結合が緊密になることは抑制されるだろう。現代語における複合動詞が形態的に語となっているため古代語の複合動詞についても同じ見方をしたくなるが、現象から見れば、補助動詞的な語が含まれていても形態的なまとまりは緊密ではなかったと判断できる。

また佐々木は上代語の文では語と語との関係や、文節と文節との関係が現代語より緩かったのではないか、という想定を支持する構文上の現象として「伊勢の海ゆ鳴来鶴の…」〔11・2805〕に対する「喚子鳥鳴八汝来」〔10・1941〕、「手折来而」〔8・1586〕に対する「手折曽我来師」〔8・1582〕を示し（下線は引用者が付した）、助詞だけでなく主語が動詞間に位置し得たことを指摘する。

さらに、文を構成する成分と成分との関係について以下の例を示す。(20)（21）はどちらも「恐き」「逢ふ」という活用語の連体形とそれに続く名詞との間に助詞「や」が位置する例で（22）は「近江の毛野」と続くところだが「の」の後に「や」がある。

(20) 惶八神の渡りは 吹く風も 和には吹かず 立つ波もおほには立たず…〔13・3335〕
(21) 大坂に　阿夫夜袁登売袁　道問へば　直には告らず　当岐麻道を告る〔記77〕
(22) 枚方ゆ　笛吹き上る　阿夫美能野　毛野の若子い笛吹き上る〔紀98〕

これらはいずれも「間投助詞」と呼ばれるもので、上代語では「間投助詞」が多く使われており、文を構成する成分と成分との関係が緩かったからだろうという指摘は古くから馬淵（1968）などにあるとする。

以上佐佐木（2015）からは、上代語における複合動詞は形態的なまとまりが緩く、複数の動詞を連続させるというものであること、一方の動詞が補助的な意味を表すものとなっていてもそれは変わらないということ、その背景に文を構成する成分と成分との関係が緩かった上代語の構文を背景としていることが了解される。しかし、それではなぜ上代語において複数の動詞を連続させ、一連の内容を表すということが行われたのか、という問いは依然として残る。そこで、次になぜそのようなことが上代語で行われたのかということを『古事記』における複合動詞を中心に考えてみたい。

## 2.『古事記』の叙述と複合動詞

（23）（24）に『古事記』の用例を示した。現代語と同じく複数の動詞からなる複合動詞があるが、注目されるのは「尋覓上往」（尋ね覓め上り往けば）、「飲酔留伏寢」（飲み酔ひ留り伏して寢ねき）のように4つ、5つの動詞から成るものが存在するということである。

(23) 故、所避追而、降出雲国之肥河上、名鳥髪地。此時、箸、従其河流下。於是、須佐之男命、以為人有其河上而、尋覓上往者、老夫与老女、二人在而、童女置中而泣。爾、問賜之、汝等者、誰。故、其老夫答言、僕者、国神、大山津見神之子焉。僕名謂足名椎、妻名謂手名椎、女名謂櫛名田比売。
古事記　巻上

故、避り追はえて、出雲国の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りき。此の時に、箸、其の河より流れ下りき。是に、須佐之男命、人其の河上に有りと以為ひて、尋ね覓め上り往けば、老夫と老女と、二人在りて、童女を中に置きて泣けり。爾くして、問ひ賜ひしく、「汝等は、誰ぞ」ととひたまひき。故、其の老夫が答へて言ひしく、「僕は、国つ神、大山津見神の子ぞ。僕が名は足名椎と謂ひ、妻が名は手名椎と謂ひ、女が名は櫛名田比売と謂ふ」といひき。

(24) 爾、速須佐之男命、乃於湯津爪櫛取成其童女而、刺御美豆良、告其足名椎・手名椎神、汝等、釀八塩折之酒、亦、作廻垣、於其垣作八門、毎門結八佐受岐、毎其佐受岐置酒船而、毎船盛其八塩折酒而待。故、随告而如此設備待之時、其八俣遠呂智、信如言来、乃毎船垂入己頭、飲其酒。於是、飲酔留伏寢。爾、速須佐之男命、抜其所御佩之十拳剣、切散其蛇者、肥河、変血而流。　古事記　巻上

爾くして、速須佐之男命、乃ち湯津爪櫛に其の童女を取り成して、御みづらに刺して、其の足名椎・手名椎の神に告らししく、「汝等、八塩折の酒を釀み、亦、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門ごとに八つのさずきを結ひ、其のさずきごとに酒船を置きて、船ごとに其の八塩折の酒を盛りて待て」とのらしき。故、告しし随に如此設け備へて待つ時に、其の八俣のをろち、信に言の如く来

て、乃ち船ごとに己が頭を垂れ入れ、其の酒を飲みき。是に、飲み酔ひ留り伏して寝ねき。爾くして、速須佐之男命、其の御佩かしせる十拳の剣を抜き、其の蛇を切り散ししかば、肥河、血に変わりて流れき。

なぜ『古事記』では2つのみならず4つ、5つと動詞を連続させる複合動詞が存在するのだろうか。この理由について以下で考えてみたい。まず土居（1957）はこの問題をめぐって以下のことを指摘している。

1．安萬侶が創作したと推定される文章の中には漢文或は敎典の中から得たと思われる詩的形象の片鱗が感ぜられるが、『稗田阿禮が誦したところの勅語舊辞を撰錄した』と推定されるところには、このような形象は全然見られず、その代わりに、劇的な所作事を見た人がその印象を話しているように感じられるような表現で、その用語、特に動詞が全く性質を異にしている。
2．形容詞は未だ發達せず、名詞も身邊の語を除いては乏しいが、動詞は人間の動作に關する語が特別に發達している。その動詞は複合のものが多く、單獨動詞は反って少くない。
3．現代の複合動詞では一つが他に従屬して形容或は補足することになっており、複合的な一動作を表現しているが、古事記の複合動詞は、各が同格で、連續している別々の動作を表現する。
4．阿禮が用いたと思われる複合動詞はすべて連續した身體的動作を表わすものであって、このように動詞を連ねると動作が眼前で行われつつあるかのように、所作事劇を見ているかのように感ぜしめる。動詞が三重四重になると動作がいよいよ具象的になる。

三重動詞、「行き廻り逢ひ」、「下り潛ぎ滌ぐ」、「讀み度り來り」「取り出で活し」、「覓き追ひ臻り」「見感で目合ひし」

四重動詞、「成り成りて成り合はず」、「修り理め固め成せ」、「見畏み逃げ還る」、「痛み苦しみ泣き伏す」、「搤み批ぎ投げ離てば、卽ち逃げ去りき」

五重動詞、「飲み醉ひ留まり伏し寢たり」「見驚き畏み遁げ退き」。「咋ひ持ち出で來て奉る」。

六重動詞「出で見目合ひして相婚して還り入り」

『古事記』において稗田阿礼が誦み習ったものを反映した部分には原初的な和語による語りが展開されている。上記の土居の指摘は「動作が眼前で行われつつあるかのように、所作事劇を見ているかのように感ぜしめる」ように複数の動詞を連ねたものが複合動詞の起源であることを示唆するものである。

さらに太田（1962）は土居（1957）を踏まえ、『古事記』の複合動詞について考察を進め、以下の2点を指摘している。なお太田は複合動詞を「日本語における動詞を重ねて叙するやり方、すなわち動詞の連用形を他の動詞の上に連ねて表現する叙法」と規定し、「連続動詞」という用語を使用している。

1．古事記には、口頭伝承の要素をより多くうけ継いでいる部分とそうでない部分とがあり、それが連続動詞の出方にあらわれていると見られる。
2．連続動詞の現象そのものについては、語の観念内容の伸縮性を増長せしめるためではなく、むしろ口頭言語の表現に即した方式でその規定を明確化する要求をもってされていると考えられる。

太田の上記の指摘は以下の点から導かれている。

・分量がほぼ同じ（A）出雲神話の一部分と（B）日向神話の一部分とを比較すると（A）には連続動詞と認めるべきものが71件（ただし四語連続のものは便宜上2件に数える、3語のものは1件扱いとする）あるのに対して、（B）には38件見える。
・（A）において見られた連続動詞重用の徴候は、一般的には口頭伝承的なものの反映と考えることができるが、そこに国語の特徴に即した表現法の探索を認める。
・「追」は（A）の連続動詞において多用される文字である。国語のオフという語は大きく二つの意に用いられる。
　1　ある点ないし方向に対して、あとから付き及ぶように行く意
　　「追下」「追至」「追来」「追往」
　2　あるものに作用を及ぼして除け去らせる意
　　「追去」「追退」「追撥」「追避」
　このように語の観念内容に相当大きな幅がある場合には、自然的な時間の経過とともに叙される口頭伝承では、語は単独では安定しがたい傾向をもつ。少なくとも、聴衆の共感を確保するためには、他の動詞の重畳によって、印象を強めておくのが効果的である。それは口頭伝承であることをやめても、漢文による記述に移らない限りは、依然として底流に存している実感であったろうと思われる。

以上から『古事記』の叙述において口頭伝承的要素が色濃い部分において複合動詞が多く使用されること、他の動詞と組み合わせることで多義的な動詞の表す意味内容を特定しやすくし、全体として印象づける効果があったことが窺える。

土居・太田の指摘は複合動詞の起源と『古事記』の叙述に反映された口頭伝承のあり方との関わりの深さを示唆する。当時の言語活動一般に考えを広げれば口頭伝承を口頭言語による情報伝達の一つと捉え直すことが許されるだろうと思う。複合動詞がある時点で発生したとすればそのような言語表現を希求する内的欲求が存在したと考えるのが自然である。これまで複合動詞が発生する背景としての内的欲求について深く掘り下げることはなかったが、『古事記』に見られる複数の具体的な動作を連続させ、出来事が眼前で行われているかのように伝えるという情報伝達のあり方はまさに複合動詞の発生を可能にした内的欲求のありかを示しているのではないだろうか。

実は『古事記』に見られたような複数の具体的な動作を表わす動詞を連ねる表現は現代語にも見出すことができる。以下に示した例がそれである。

(25) その日。
小兵衛は、昼すこし前に増田屋へ着き、
「いそがしいのに、毎日、すまぬな」
「とんでもないことで・・・」
弥七と共に、酒をのみ、昼飯を食べた。
のみ、食べながらも弥七は、一枚開けた窓の障子へ身を寄せ、幸橋御門の方を注視している。
池波正太郎『剣客商売　白い鬼』新潮文庫

(26) 幕が開くとたんに、ガサガサと紙袋の音が聞こえはじめる。
女の見物が、何か食べはじめるのだ。
同時に、あちらでもこちらでも役者の声も三味線の音も押しつぶされてしまうような高声で、おしゃべりをはじめる。
若い女も中年女も、老婆も、みんな、しゃべり、食いはじめる。
池波正太郎『新年の二つの別れ』朝日文庫

(25)(26) は2つの動詞が連続した例である。(25) では前の文の「酒をのみ、昼飯を食べた」を受け、それぞれの目的語を各動詞の意味内容に含みつつ連続させ「のみ、食べながらも」と表現している。(26) でも同じく前の文にある「何か食べはじめるのだ」「おしゃべりをはじめる」を受け、それぞれの目的語を各動詞の意味内容に含みつつそれをまとめて「しゃべり、食いはじめる」と表現していることが分る。現代語では複合動詞と区別するため複数の動詞を連続させる場合には読点を打つことが一般的である。したがって、表記上これらの例はいずれも複数の動詞の連続であることが分るが、複数の動詞は前段の内容を受け、それぞれの目的語を各動詞の意味内容に含むことで複数の動詞を連続させることを可能にしていることが分る。

(27)(28)(29) は4つ以上動詞が連続する例である。

(27) 私も弟も、とうてい上の学校へは行けずに、十三歳のときから世の中へ出て行ったほど貧しかったが、ただの一度も、ひもじいおもいをしたことはない。
いつも腹いっぱいに食べ、そのころは、東京の町の何処にでもあった草原や空地や材木置場や石置場ではねまわり、喧嘩し合い、叫び、わめき、笑い、泣き、精気にみちみちていたものである。
池波正太郎『食卓の情景』新潮文庫

(28) 翌日、おこんは睦月を連れて今津屋にお礼に向かった。
その昼下がり、空也が独り庭の堅木の丸柱相手に走り、跳び、叩き、再び走り回って別の丸柱に向かう稽古に余念がなかった。
佐伯泰英『居眠り磐音江戸双紙　竹屋ノ渡』双葉文庫

(29) それが槍折れと木刀稽古の始まりだった。両者ともに手加減することなく突き、殴り、打ち、弾き、躱しての立ち合いが四半刻も続いた。
佐伯泰英『居眠り磐音江戸双紙　竹屋ノ渡』双葉文庫

(27) は作者の子どものころを回想した部分に見られ、自分と弟がしていた複数のことが列挙されている。また (28)(29) には短い時間に1人ないし2人で行った、剣術稽古における連続した動作が示されている。いずれの例でも具体的な動作が連続して示され、『古事記』に見たもののように一連の出来事の展開を映像的に把握することができる。

以上の明らかに動詞の連続と考えられる現代語における諸例と『古事記』における複合動詞とには共通性が見出せる。それは臨場感を高め、出来事の展開を映像として読者に思い浮かべさせる効果を持つということである。古代語における複合動詞は形態的まとまりが緩やかで、複数の動詞を連続させる表現であったがゆえに、逆に制約が少なく、場合によって4つ以上の動詞を連続させるような臨場感あふれる表現の構築を可能にしたのではないだろうか。

なお複合動詞の成立について古代中国語からの影響を指摘する見方がある（沖森1990）。沖森は「複合動詞成立の要因」と題する最後の節で以下のように述べる。

複合動詞は概念の複合によって動きを限定的に叙述するものであって、豊かな言語表現を求める内的必然性によって生じたものであろう。「ただ「誓願賜」（法隆寺薬師仏造像記）「造立倭国」（元興寺露盤銘）などの上代変体漢文に見える漢語動詞の熟語と全く無関係であるとも思われない。例えば「開設」は「夕されば屋戸開け設けて（屋戸開設而）」（万・744）、「散乱」は「玉かも散り乱れたる（散乱而在）川の常かも」（万・1685）、「過去」は「時過ぎ行かば（時過行者）後恋ひむかも」（万・2209）、「帰来」は「又打山ゆ帰り来ぬかも（還来奴香聞）」（万・1019）、「相思」は「相ひ思はぬ（不相念）人を思ふは」（万・608）などに対応しているようにも見られる。特に奈良・平安時代の漢文体が四六駢儷文の四

字句・六字句からなる対句を多用する文体を基調としていることは、日本語の語調、複合語の構成に影響を及ぼした蓋然性を想定させるのである。

また内田（2005）73～74頁も以下のように述べている。

一方、『古事記』は、先の「固成」のように、倭語の訓字を逐語的に並べて事態を表現する方法をもった。右の段では、「逃下」がそれである。「逃」には殊にその複合が多く、一覧すると次のように多様な組み合わせをもつ。

逃―散、出、行、去、入、隠、返（還）、来、下、退、逃、亡、上、遁、渡

訓みは省略するが、この方法によって事態の言い表しは細かく分化する。歌謡にも「和賀尓宜能煩理斯」（記歌謡98　雄略）の例があり、倭語の表現としても自然であった。とは言え『古事記』はこの方法を

於是、飲酔留伏寝［飲み酔ひ留り伏して寝ねたり］（上巻）

という例ほどに、極端なまでに多用する。これが、『源氏物語』の、例えば、

斯かる程に、すこしなよびやはらぎ過ぎて、好きたる方に引かれ給へりと……（源氏物語　匂宮　大島本）

といった表現と類似するのは注目してよい。おそらくは、もと漢語を逐語的に訓み並べていった結果成立したのであろうけれども、日本語文にとって極めて好都合な方法でもあった。

日本人は漢字・漢文に習熟することで文字言語および文章表現法を獲得した。多くの先行研究が指摘するように『古事記』を撰述する上でも漢文表現が取り入れられ、その文章表現に生かされた。沖森が言うように四六駢儷文の影響が大きいのかどうかについては疑問もあるが、『古事記』における「～去」「～得」など補助動詞を用いた複合動詞に六朝口語の影響を指摘するものもあり（瀬間1995）、長い年月続いた漢文訓読、漢語の受容によって複数の動詞を並べる叙法としての複合動詞が成立した蓋然性は高いと考える。

中国語は日本語のような膠着語とは異なり、語形変化せず、単音節語を中心とし、語順で語の文法的関係が表される孤立語である。そのためそれぞれの語が独立しており、そのことが上代語における複合動詞の緊密度が緩いという結果を生んだとも考えられる。冒頭で述べたように動詞＋動詞型の複合動詞は現代でも日本語、朝鮮語、チュルク諸語、中国語、インドを含む南アジア諸言語などアジア地域の言語に共通して見られるとされる。それは古代から続く歴史的な中国との交渉に拠るものかもしれず、アジア言語に共通する複合動詞を必要とする言語表現のあり方に起因するのかもしれない。

複合動詞が成立するためには中国語との交渉といった外的要因だけでなく、それを言語表現に取り入れる動機につながる内的要因も重要である。それについてはこれまで見てきたように上代語における話者が出来事を眼前で行われているかのように複数の具体的な動作を連続して表現するという情報伝達のあり方が深く関与しているのではないだろうか。

## 3．複合動詞を発生させた日本語の特徴

日本語には古くから複合動詞が存在するが、歴史的にさかのぼればさかのぼるほどその形態的なまとまりは緩い。しかし、それゆえ制約が少なく、二つならず多くの動詞を連続させることができ、出来事が眼前に展開されているかのような臨場感に富む表現法を可能にした。日本語における複合動詞の起源および成立を考える際、出来事を眼前で行われているかのように表現するという情報伝達のあり方が重要な役割を果たしたと考えている。さて、出来事を眼前で行われているかのように表現するということは『古事記』の口頭伝承のみならず現代日本語の特徴としても指摘されているところである。次にそのような日本語の特徴を見ていきたい。

熊谷（2011）は発達心理学の立場から日本語の基本特性として「日本語は映像的な言語である。そして、日本語のこの特性を生み出しているのは、話し手と聞き手による共同注視の働きである」ことを示している。以下で熊谷（2011）をもとに日本語の言語的特徴について整理する。熊谷（2011）3頁によれば日本語は以下の特徴を有する。

日本語は、人と人が相並んで目の前の映像を注視する、という形を基本として、ことばが組み立てられている。このとき、二人が捉える映像は最初から同じではない。それらを調整して共有の映像を作ろうとするのが日本語の基本的な働きである。

このことは、映像を直接に目の前にする話し手と聞き手のあいだだけでなく、手紙の書き手と読み手、文学作品の作者と読者のあいだでも変わらない。そこに実際の映像がなくても、想像の映像を作り、共有していこうとする。

そして日本語において（30）のような会話が成り立つのも日本語ならではである。

（30）

A なかなか来ないね。
B あ、来た。
A どこ？
B あそこ。
A あのメガネの人？
B いや、その後ろの人。
A あれが高橋さんか・・・・・・。

AとBは同じ方向を見、待ち人が現れるのを待っている。Bだけが待ち人の姿を知っており、会話は了解事項にもとづく共有映像に依存しながら進められているから、きわめて省略的な、二人のあいだでしか通じないものになっている。以上のように熊谷は日本語は話し手・

聞き手・共有映像の構造の三項関係をもとに会話が展開されると述べる。

発達心理学から見ると、話し手と聞き手が共有する映像の枠は最初からできているわけではない。1歳前後になると、子どもは指さしなどの方法で、自分が注目する対象に大人の注意を向けさせることができるようになり、大人が指示する対象にも目を向けるようになってくる。このような関係の中で成り立つのが共同注意である。共同注意は子ども・大人・対象の三項関係のもとで形成される。指示方法は、最初は指さしとそれに伴う音声や視線だが、次第に言語が用いられるようになる。ここまではどの言語にも共通する事実である。

三項関係のもとで二人が対象に向ける視線は一般に共同注意と呼ばれる。共同注意には視覚以外に聴覚や運動なども含まれるが、日本語は二人の視線を調節し、共有の映像を形成しようとする働きに重きを置いている。そのため熊谷は共同注意ではなく、共同注視・共視という言葉を用いる。これが日本語が映像的であるとする所以である。このような日本語の特徴から主語や目的語の省略が多い理由、助詞「は」と「が」と「これ」「それ」「あれ」などの指示詞における使い分けの原理およびその背景や日本語がなぜSOVの語順なのか、なぜ、場面や相手によってことばを使い分けるのか、といったことが説明される。

類似の指摘は他にも森田（1998）、熊倉（1990）に見られる。森田（1998）4頁では『朝日新聞』朝刊に連載されていた漫画「となりのやまだ君」（平成9年1月17日掲載）を取り上げ、その内容をめぐって以下のことを述べている。

> 言葉のやりとりは相互に話題や場面を共有してこそ初めて成り立つ。談話の冒頭は、話し手・聞き手の互いが共通の場面に立つとの了解があるからこそ初めて正しいコミュニケーションが成り立つのであって、そこで初めて話題とする事柄も両者の一致を見るわけである。

また続いて同じ『朝日新聞』の小話欄に載った以下の一口話をめぐっても、

> わが家の玄関の飾り窓にハチが上手に巣を作った。大騒ぎする私。「ハチの巣とって、とって」といったら、主人がカメラを持ってきた。
>
> （平成2年8月19日掲載）

> 談話においては、話し手も聞き手も、常に同じ情報を同じ視点でとらえているのだとの了解が基本にあって、それを前提とした言語の形式が文法や表現・語彙の各面に色濃く現れており、日本語の一大特徴ともなっている。

と述べる。これらは発達心理学の立場からなされた日本語の基本特性に関する熊谷の指摘と合致する。以上を言語学の立場からやや抽象的に表現すれば以下のようになろう。

> 場面を叙述として示すか、話し言葉のように了解ずみのものとして特に示さないかの違いはあるにしても、日本語は場面を前提としたうえでの発話が多く、それだけ場面への依存度は高いと見てよい。それが結果として主語省略や文末の曖昧性を生むのである。
>
> さて場面依存的で自己の視点中心に事物をとらえていくという発想は、言い換えれば、話者が話題とする場面へ目を向けて、自身の目に映った姿として対象をとらえ、自己の主観として事柄を叙する表現態度でもある。客観世界における第三者同士の事象を客観的に記述するといった態度とは程遠い。（前掲書18頁）

また熊倉（1990）38～39頁では英語では何も実体がない観念的な言葉〈nobody〉〈nothing〉があり、文頭に立つことができることを引き合いに出し、「大和言葉では、何か具体的なイメージが言語主体になければ、言葉とならない」。「現象を観察し表出することが、古代日本語の本質的な過程だから、何もなければ当然のことながら、言語化できない道理だ」と述べる。そしてそれをまとめて以下のように述べる。

> 日本語は話し手の内部に生起するイメージを、次々に繋げていく。そういうイメージは、それが現実のイメージであれ、想像の世界のものであれ、話し手の内部では常に発話の時点で実在感をもっている。話し手が過去の体験を語るときも、このイメージは話し手の内部では発話の時点で蘇っている。その「具体性」は、空間的には「即物的」だし、時間的には「即時的」なのだ。

このことも日本語では話者が自らの中に浮かんだ映像をもとに発話を行っていることが示されているという点で興味深い。

また認知言語学における〈事態把握〉という概念から日本語の特徴を考察したものに池上（2003）（2004）（2006）（2007）（2011）などがある。以下池上（2011）をもとに〈事態把握〉という概念から見た日本語の言語的特徴について整理する。池上は認知言語学における〈事態把握〉という概念から日本語話者は〈主観的把握〉のスタンスに傾くとしている。認知言語学では、〈話者〉（主体）が発話に先立って言語化の対象とする〈事態〉（客体）に課す認知的な処理の営みを〈事態把握〉と呼び、それが〈主客合一〉の構図をとる場合を〈主観的把握〉、〈主客対立〉の構図をとる場合を〈客観的把握〉と二つの類型を区別する。そして両者の概念は以下のように諒解される。

> 〈主観的把握〉：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の直接の当事者として体験的に事態把握をする―実際には問題の事態の中に自らの身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

> 〈客観的把握〉：話者は問題の事態の外にあって、

傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。―実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観者ないし観察者として客観的に（自己を含む）事態を把握する。

（池上2011）

池上は日本語話者と英語話者とで〈事態把握〉のスタンスが異なるために対照的に異なる言い回しになっている場合を具体的に検討している。

(31) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
（川端康成『雪国』）
b. The train came out of the long tunnel into the snow country.
（E. Seidensticker（1957）訳：汽車は長いトンネルから出て雪国へ入ってきた）

(31) は川端康成『雪国』の冒頭の文と英語訳を示した例である。原文（31a）は〈主観的把握〉のスタンスでの言語化がなされ、英語訳（31b）は〈客観的把握〉のスタンスでの言語化がなされている。(31a) では、作家が作品の中の主人公に自己投入する形で主人公と一体化し、主人公が体験する事態の中に身を置いたまま、自らの体験していることを言語化するというスタンスでの描写になっている。〈主人公〉（主体）が問題の〈事態〉（客体）に臨場するという〈主客合一〉の構図であり、汽車に乗っている〈主人公〉にとって〈汽車〉は見えの対象にならないから、言語化されることもない。他方、(31b) では、翻訳者は問題の〈事態〉の外に身を置き、〈主人公〉を乗せた汽車がトンネルから出てくるのを離れたところから眺めて言語化するという〈主客対立〉の構図になっている。〈事態〉の外に身を置く翻訳者にとっては、汽車はもちろん見えの範囲に含まれるものであり、それが自分の身を置く仮想的な位置に向かって移動して〈くる〉ということまで言語化されている。

(32) [道に迷って人に尋ねる場合]
a.「ここはどこですか。」
b. “where am I ?”（直訳：私ハドコニイマスカ）

(32) では、日本語話者の使う表現は、自分のいまの居場所が分からなくなり、その現場で、回りをキョロキョロ見まわしているという感じで、〈話者〉（主体）が〈事態〉（客体）の中に身を置いている〈主観的把握〉である。英語話者は（自分の分身をその場に残したまま）自分はその場から離れ、外から自分の分身を含む事態を客体化して眺めるという構図で〈事態把握〉をする。他者の居場所を尋ねる場合（たとえば、「彼女はどこにいますか」と “where is she ?”）なら、どちらの言語でもおかしくない。〈彼女〉は話者のいまいる現場ではない他の場所にいるのであるから、ごく自然に〈主客対立〉の構図で処理できるわけである。英語話者が迷っているのが自分である場合にも同じ文型で言語化するのは〈自己の他者化〉という認知的スタンスを容易に採れるからである。また日本語話者の言い回しには〈私〉が言語化されていない。〈主客合一〉の状況では、〈主体〉としての〈自己〉は〈主体〉として振る舞う〈話者〉にとっては、認知的な処理の対象として〈客体化〉されることがないからである。

(33) a.「(私（は)）うれしい。」
??「あなたはうれしい。」
??「彼女はうれしい。」
b. “I am happy ?” / “You are happy ?” / “She is happy ?”

(33) は従来、〈人称制限〉という名称でしばしば取りあげられてきた問題である。容易に〈自己〉を〈他者〉化し、〈客体〉として〈主客対立〉の構図にもっていける英語話者にとっては、〈自己〉（1人称）の場合も〈他者〉（2人称、3人称）の場合と同列に扱うことに違和感を抱かない。〈自己〉と〈他者〉の区別をそのまま受けとめる日本語話者にとっては、そのような扱いは馴染まない。〈私〉にとっては〈自己〉である〈私〉の〈私的〉な気持ちはもちろん感じとれる。しかし、〈他者〉である〈あなた〉や〈彼女〉の〈私的〉な気持ちは本人たちによっては感じとられているのであろうが、本人たちから見て〈他者〉になる〈私〉が直接感知できるはずがない、ということになる。

前節で古代語における現象から複合動詞の結合の緩さを確認し、複数の動詞を連続させることの背景に動作が眼前で行われつつあるかのように、劇を見ているかのように感じさせる当時の口頭伝承のあり方が存在することが明らかになった。しかし、この節ではそれが現代日本語における会話に見られる特徴と一致することが明らかになった。古代から現代に至るまで日本語では自分と聞き手の眼前にあるものをもとに会話や叙述を展開することを基本とするが、それは発達心理学の知見に基づけば話し手・聞き手・共有映像の三項関係に忠実な言語ということになろうし、認知言語学の知見に基づいて〈事態把握〉から見れば日本語話者は〈主観的把握〉のスタンスに傾き、問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の直接の当事者として体験的に事態把握をする、実際には問題の事態の中に自らの身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をするということになろう。

## 4．まとめと今後の課題

本論では日本語における複合動詞の起源について論じた。その結果古代において複数の動詞を連続させ、一連の動作が眼前で行われつつあるかのように、劇を見てい

るかのように聞き手に伝える口頭伝承のあり方がその発生に大きく関係しているという見通しを示すことができた。それは現代に至るまで存在する日本語が持つ言語的特徴を背景としつつ、当時における漢語・漢文の習熟の影響も受けることにより、可能になったと見られる。

そのようなことに発生の起源を持つ複合動詞であるが、古代以来の歴史的な展開として、意味の一体化が進行することで、形態的な一体化が引き起こされ、そのことを契機として語構成が変化し、現在に至るという道筋が想定される。本論は数々の先行研究で得られた知見を整理、統合したに過ぎないが、本論を基に日本語の複合動詞における歴史的展開を引き続き考察し、実態を解明していくことを今後の課題としたい。

## 参考文献


青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』ひつじ書房

池上嘉彦（2003）「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標（1）」『認知言語学論考３』ひつじ書房

池上嘉彦（2004）「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標（2）」『認知言語学論考４』ひつじ書房

池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会

池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』筑摩書房（池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』講談社を改題）

池上嘉彦（2011）「言語研究のおもしろさ」大津由紀雄編『ことばワークショップ　言語を再発見する』開拓社

内田賢徳（2005）『上代日本語表現と訓詁』塙書房

太田善麿（1962）「古事記の文体に関する一考察―動詞連続の表現について―」『国文学解釈と教材の研究』7―3

沖森卓也（1990）「古典語の複合動詞」山口明穂編『別冊国文学38古典文法必携』學燈社

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（2013）「語彙的複合動詞の新体系―その理論的・応用的意味合い―」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』ひつじ書房

金田一春彦（1953）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂

熊谷高幸（2011）『日本語は映像的である　心理学から見えてくる日本語のしくみ』新曜社

熊倉千之（1990）『日本人の表現性と個性』中央公論新書

小島憲之（1962）『上代日本文學と中國文學　上』塙書房

佐佐木隆（2015）「二つの活用語の間に助詞がある表現―上代語の「語りし継げば」の類―」『学習院大学文学部研究年報』62

山王丸有紀（2009）「上代複合動詞の結合事情についての一考察」『国語語彙史の研究28』和泉書院

関一雄（1977）『国語複合動詞の研究』笠間書院

瀬間正之（1995）「古事記と六朝口語」『古事記研究大系10　古事記の言葉』高科書店

土居光知（1957）「古事記に於ける詩的形象」『古事記大成２ 文學篇』平凡社

中村幸弘（1969a）「万葉集中の『思ひ―』型複合動詞について」『国語研究』28

中村幸弘（1969b）「源氏物語中の「思ひ―」型複合動詞調査ノート」『国学院高等学校紀要』11

中村幸弘（1971）「上代複合動詞の緊密度について」『国学院高等学校紀要』13

百留（2015）「古代日本語動詞における語彙性の検討」斎藤倫明・石井正彦編『日本語語彙へのアプローチ』おうふう

馬淵和夫（1968）『上代のことば』至文堂

森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』中央公論新社

吉澤典男（1952）「複合動詞について」『日本文学論究』